

〈合評会〉川瀬和也『全体論と一元論——ヘーゲル哲学体系の核心』（晃洋書房, 2021）第1章

榮福 真穂

## 1. 議論の概観

本稿は、川瀬和也『全体論と一元論——ヘーゲル哲学体系の核心』の第1章を扱う<sup>1</sup>。本書全体のイントロダクションにあたる第1章は、ヘーゲル『大論理学』を現代において研究する意義の提示が主題となっている。そこに含まれる6つの小節は、「なぜその研究対象なのか」を述べたものと「なぜその研究方法なのか」を述べたものの二つに大別されるように思われる。差し当たりこの区分に沿って、第1章を評者なりに再構成しつつ、内容を簡単に概観しよう（6節は本論の内容の予告なので割愛）。

### 1.1. 研究対象について

#### なぜヘーゲルなのか（第1節、第4節）

第1節では、ときにその欠点とも見なされうるヘーゲル哲学の体系性に注目して、まさにこの体系性にこそヘーゲル哲学の現代的意義があると述べられる。本節の議論を簡単にまとめると以下のようなになる。

- ドゥルーズやラッセルの批判はヘーゲル哲学の閉鎖的な体系性へと向けられており、実際にそう解釈できる文言は彼自身の叙述のなかに見出される。
- 「閉鎖的な体系の完成者」としてのヘーゲル批判は20世紀に再三繰り返されてきたが、体系という考え方そのものは決して過去の遺物ではない。現代においても、たとえば世界のすべては自然科学によって解決されると考える自然科学主義には、「全てを一つの秩序のもとに把握するという試み」が認められる。それゆえ、体系志向の先駆者であるヘーゲルを読むことには今なお意義がある。

\* 以上に加え、本節では最後に、「全体論」と「一元論」という解釈の二つの観点で予告される。意義の話の本筋からは逸れるが、2章以降の読解のキーワードとなる語なので、簡単に引いておく。曰く、全体論とは、体系の諸要素が相互に支え合っており、一方向的な基礎づけ関係がないことを意味する（逆に、一方向的な基礎づけ関係をもつ体系の例としてスピノザが挙げられている）。他方、一元論とは、主観と客観の、あるいは心と物の二元論の拒否を意味する、と言う。

---

<sup>1</sup> 2021年12月10日に京都大学西洋近世哲学史専修において川瀬和也『全体論と一元論——ヘーゲル哲学体系の核心』合評会が行われた。本稿は筆者がそこで評者として発表したものに軽微な修正を加えたものである。

第4節ではさらに焦点を絞って、現代の分析哲学の文脈における三つの対立に関連づける仕方ではヘーゲル哲学の現代的意義が示される。以下に簡単にまとめよう。

(1) 形而上学における、存在論優位か認識論優位かという対立。この問題は、形而上学をも含む論理学の体系を構築するというヘーゲルの試みによって克服が目指されたものでもある。

(2) 科学に先行するものとして形而上学を位置付ける「第一哲学主義」と、形而上学による基礎づけを拒否する自然主義との対立。ヘーゲルの立場はどちらにも属さない第三のものなので、新しい展望をもたらしてくれる。

(3) 物的一元論と心身二元論との対立。論理学では主観と客観の統一が論じられるが、ヘーゲルの立場は物的一元論とも言いきれないものである。

### **なぜ『大論理学』の「概念論」なのか（第5節）**

本節では、本書がヘーゲルのテキストの中でもなぜ『大論理学』のとりわけ「概念論」を扱うのかが、前節までに示された問題関心との関連において示される。

- 本書の関心の中心である「体系」が提示されるのが、一般に『大論理学』であると言われるため。
- 第三分冊にあたる「概念論」（主観的論理学）は、「存在論」「本質論」（客観的論理学）で展開された形而上学を踏まえ、それと認識論との関係を主題とする。よって、認識論と形而上学、あるいは心と物との関係という本書の関心にとって「概念論」こそが最重要であるため。

また、副次的な理由として、「概念論」を研究することで、ヘーゲル研究全体にとって欠けている部分を補うことができると言われる。ヘーゲル研究は伝統的に『精神現象学』を偏重してきたのであり、さらに、比較的手薄な『大論理学』研究は「本質論」と「存在論」を中心に行われてきたのである。

## **1.2. 研究方法について**

### **なぜ自らの言葉での語り直しや再構成を行うのか（第2節）**

本節では、従来の研究より大胆な解釈や再構成を行うという手法を採用する理由が示される。それは以下のようなヘーゲル研究に固有の事情によるという。

- 岩崎によれば、ヘーゲル哲学は賞賛と拒絶の両極端の評価を受けてきたのであり、その（特に拒絶の）理由はヘーゲル哲学の極端な難解さにあるため。原因がヘーゲル哲学そのものにある以上、上記の状況は現在も将来も変わらない。

- 細部の緻密な読解とテキストの合理的再構成とが、とりわけ注意深く行わなければならない。ヘーゲルのテキストは一文一文の内容と議論の構成とがともに難解なので、研究者が大きく介入しないかぎり意義のある論文にならないため。

### なぜ英語圏の研究を重視するのか（第3節）

著者によれば、本書はピピンの認識論的な解釈の重要性と、形而上学を重視するスターンによる批判の正当性を「共に大筋で認める立場に立っている」が、ヘーゲル哲学の価値はむしろ、認識論と形而上学の対立そのもの乗り越えようとしたところにあるという。この点で、英米圏の研究の批判的継承が本書のアプローチの基本線だということになるが、その内的・外的理由は以下のようにまとめられる。まず内的理由は、1990年前後からの英語圏における研究に哲学的意義を感じるから、ということだ。そして外的理由は、哲学研究全体における分析哲学の存在感が大きくなっているから、とまとめられるだろう。

## 2. 疑問点

### 2.1. 大枠にかんして

1章でのいくつかの正当化（研究対象の正当化／手法の正当化）は、果たしてうまくいっているのだろうか。

① 〈体系志向は現在も生きているので先駆者としてヘーゲルを読むことは有意義〉という主張にかんして

単に体系志向というだけなら先駆者はたくさんいるはずであり、あえてヘーゲルであることの説明にはならない。体系志向の例は自然科学主義だが、著者自身もこの立場を称揚したくて、ゆえにその先駆者であるヘーゲルを重視しているという流れにも取れるが、そういう理解で良いのか。

② 〈分析哲学の存在感が大きくなっているので英語圏の研究を重視する〉という主張にかんして

「流行りに乗りました」というだけでなく、「流行りに乗るべき」（10頁では「重視されるべき」という言い回しがなされる）というのは強すぎる主張に思えるし、少なくとも私は同意しかねる。そうした外在的事情よりむしろ、著者自身が分析系の研究のどういった点に「重要な哲学的意義」を見出しているのかを説明してほしいと感じた。

### 2.2. 細かい論点

### ① 自然主義の説明について

著者は自然主義について、一方で「哲学と自然科学との連続性を強調する立場」と説明するが、他方で「哲学が科学に先行しそれを基礎づける」という第一哲学的構想を退ける立場」という井頭の説明を採用している。後者は哲学と自然科学をそれぞれ独立のディシプリンとして扱う態度を意味しているように思えるので、連続性の強調とはむしろ逆の立場に見える。これをどう理解したらよいか。

### ② 心身問題の一元論的解決にかんするヘーゲルの独自性について

「延長実体」と「思惟実体」の二元論を一元論によって克服する試みはまさにスピノザの試みでもあると言えるだろうが、スピノザの解決とヘーゲルの解決との差はどこにあるのか。全体論の観点からも一元論の観点からも、「スピノザにも言えそう」という印象をしばしば受けた。あえてスピノザではなくヘーゲルであることに意味がある、と言えるのであれば、それはどういった点に見出されるのか。

### ③ 幾何学的体系との対比について

スピノザの定義を「発生的 *génétique*」なものとみなす解釈はゲルーやマシュレ以降ある程度人口に膾炙した解釈である。松田は、『エチカ』は非線形的に読まれるべき著作であり、完成した閉鎖的な幾何学的体系ではない（その試みは失敗している）と主張している。スピノザの体系が硬直した静的なものであることを前提として論を進めるのはいささか乱暴ではないか。

## 参考文献

Gueroult, M.[1968]. *Spinoza I – Dieu.*, Aubier.

Macherey, P.[1990]. *Hegel ou Spinoza, La Decouverte.* (邦訳：鈴木一策, 桑田礼彰(訳)『ヘーゲルかスピノザか』, 新評論, 1998年.)

松田克進『スピノザの形而上学』, 昭和堂, 2009年.